

一代五時鷄凶 (編集)

建治元年 五四歳

百卷の論 壽命三百年
千卷 羅什訳 法雲自在王如来
觀自在王如来

大論に云はく、十九出家三十成道
竜樹菩薩 第十一馬鳴菩薩の御弟子付法蔵第十三
猛

三十万偈
大悲方便論 十万偈
大心論 十万偈
大無畏論 十万偈

実大乘
権大乘

華嚴経

二七日 五教を立て一代を撰尽す
三七日 華嚴宗

杜順和尚
智儼法師
法蔵大師
香象大師

賢首
華嚴

法師 和尚
結経は梵網経 大乘戒之を出だす

阿含経 小乗 十二年

長阿含 俱舎宗
中阿含 論
増一阿含 成実宗
雑阿含 戒

結経は遺教経 小乗戒之を出だす

方等部 大乘 深密経五卷 或は云はく法華已前
或は説時不定 或は云はく法華以後
或は十六年 或は八箇年

権大乘

瑜伽論 一百卷 弥勒菩薩の説
唯識論 三十頌 無著菩薩の説
有相宗 三時を立て 世親菩薩の造

法相宗

一代を撰尽す

瓔珞經

結經

六經十一論

慈恩大師

楞伽經

或は諸法無行經

或は云はく金剛般若經

或は云はく大円覚經

或は首楞嚴經

或は云はく一切經

或は云はく教外別伝

菩提心論

禪宗

一卷七枚

達磨大師

或は云はく竜樹の造

大日經

七卷

金剛頂經

三卷

蘇悉地經

三卷

真言宗

顯密二道を分かつ

五藏を立て或は十住心を立つ

善無畏三藏

金剛智三藏

不空三藏

一行阿闍梨

或は云はく方等部・或は云はく華嚴部・或は般若部・或は云はく法華部・
或は云はく涅槃部・或は一代諸經の外

雙觀經

阿彌陀淨土經

難行易行

聖道淨土

雜行正行

諸行念仏

曇鸞法師

道綽法師

善導和尚

懷感法師

小乘法師

法照

三十年

般若經

大品般若 或は云はく二十二年或は云はく十四年
 光讚般若 或は云はく二十二年或は云はく十四年
 金剛般若 或は云はく二十二年或は云はく十四年
 天王問般若 或は云はく二十二年或は云はく十四年
 摩訶般若 或は云はく二十二年或は云はく十四年
 仁王般若 或は云はく二十二年或は云はく十四年
 結經

百論
 中論
 十二門論
 大論

提婆菩薩の造
 竜樹菩薩の造
 同
 同

三論宗

或は云はく四論宗
 或は云はく法性宗
 或は云はく無相宗

淨影
 興皇
 嘉祥寺吉蔵大師
 道朗
 三時を立て一代を撰尽す
 或は二蔵を立つ
 或は三転法輪を立つ

り。

華嚴三七日・阿含十二年・方等般若三十年・已上四十二年な

法界性論に云はく四十二年
 無量義經に云はく「方便力を以ての故に四十余年には未だ真実を躰はさず」
 又云はく「無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐるとも終に無上菩提を成ずるこ
 とを得ず。所以は何。菩提の大直道を知らざる故、險徑を行くに留難多きが
 故に」
 又云はく「大直道を行けば留難無きが故に」

法華經

諸宗依憑宗
 仏立宗
 天台宗
 法華宗
 顕露彰灼宗

普賢經

結經
 叡山の戒壇

世尊法久後要当説真実

と云

廢也

正直捨方便

但説無上道

或は前三教と云ひ、或は前四教前四味
ふなり。或は先の三教に撰尽するを云ふ

四時七教

五時八教

唯一仏乘

雖示種々道
將非魔作仏
久黙此要

其実為仏乘
悩乱我心耶
不務速説

經等

華嚴經・大日經・深密經・楞伽經・小品經・觀

無量義經

涅槃經等

「我が所説の經典は無量千万億にして已に説き今説き當に説かん。而も其の
中に於て此の法華經は最も為れ難信難解なり」
記の六に云はく「縦ひ經有つて諸經の王と云ふとも已今當説最為第一と云
はず。兼但对帶、其の義知んぬべし」玄の三に云はく「舌、口中に爛る」と。
籤の三に云はく「已今當の妙此に於て固く迷へり。舌爛れて止まざるは猶華
報となす。謗法の罪苦、長劫に流る」

又云はく「諫曉すれども止まず」

像法決疑經

結經

一日一夜

涅槃經

八十御入滅

七十九・八十・八十一
八十二・百五・百二十一

法四依

第六卷

依法不依人

人四依

依義不依語

依智不依識

菩薩等識

依了義經

不依不了義經

爾前の經々

法華經

釈尊

主

主上
天尊
世尊
法王
國王
人王
天王

違はゞ八虐

天竺

二天
大梵天

魔醯修羅天
毘紐天

第六天
帝釈天
師子頰王
浄飯王

震旦

三皇
五帝
三王等

日本国

神武天皇

師

師匠

違はゞ七逆

外道師

三仙

加毘羅
樓僧伽
勒沙婆

六師

外典師

四聖

尹喜

務成
老
呂望

周公旦
孔子
顔回

涅槃疏に云はく「一体の仏、主師親と作す」
章安の釈

親

違はゞ五逆

八親
六親

世尊

三界特尊

二十五有

理性の子
結縁の子

今此三界皆是我有 其中衆生悉是吾子
文句の五に云はく「一切衆生等しく仏性あり。仏性同じきが故に等しく是子なり」

而今此処多諸患難 唯我一人能為救護

娑婆有縁仏

玄の六に云はく「本、

此の仏に従って初めて道心を発こし、亦此の仏に従って不退の地に住す。文句の六に云はく「旧は西方の無量壽仏を以て、以て長者を合す。今は之を用ひず。西方は仏別に縁異なり。仏別なる故に、隠蹟の義成ぜず。縁異なるをに子の父の義成ぜず。又此の經の首末に全く此の旨無く、眼を閉ぢて穿鑿す。故に子の著脱は近けれども尚知らず。彌陀は遠きに在り、何んぞ嘗て變換せん」云云。

○記の六に云はく「西方等とは彌陀・釈迦の二仏既に殊なり。豈、彌陀をして珍玩の服を隠さしめ、乃ち釈迦をして弊垢の衣を著せ使めん。然も釈迦は珍服の隠すべき無く、彌陀は唯勝妙の形なるに當たる。況んや宿昔の縁別に化道同じからざるをや。結縁は生の如く成就は養の如し。生養の縁異にして父子成ぜず。珍弊、途を分かち著脱殊に隔たり、經を消する事欠け調就の義乖けり。当部の文に永く斯の旨無し。舍那著脱等とは、舍那の動せずして而も往くに迷へり。彌陀の著弊は諸教に文無し。若し平等意趣を論せば、彼此奚んぞ嘗て自ら矜らん。縦ひ他を我が身とするも還つて我が化を成ぜず。我他の像を立つれば乃ち他の縁を助く。人之を見ざれば化縁便ち乱る。故に知んぬ、夫の結縁とは並びに忘身に約すること。我昔曾て二万億等と云ふが如し。況んや十六王子の始めより今に至りて機感相成し任運に分解するをや。是の故に彼の彌陀を以て此の變換となすべからず」と。

十六王字

大通の太子

沙弥

第一阿・仏

種熟

東方有縁

主

脱

師

親

第九阿彌陀仏

種熟

西方有縁

主

脱

種熟

娑婆世界

親師

第十六釈迦牟尼

脱

親師

就記の九に云はく「初め此の仏菩薩に従つて結縁し、還此の仏菩薩に於て成す」

玄の六に云はく「仏尚自ら分段に入つて仏事を施作す。有縁の者何ぞ来たらざるを得ん。譬へば百川の海に潮すべきが如し。縁に牽かれて忘生するこ亦復是くの如し」

又云はく前に之を書す「本此の仏に従つて初めて道心を発こし、亦此の仏に従つて不退の地に住す」

劣応身釈迦如来

俱舍宗
成実宗
律宗

本尊

盧舍那報身 華嚴宗の本尊

勝應身に当たる 法相宗の本尊

釈迦如来 勝應身に当たる 三論宗の本尊

釈迦如来 法身 胎藏界 真言宗の本尊

大日如来 報身 金剛界

天台は応身 劣應 勝應

阿弥陀仏 淨土宗の本尊

善導等は報身

五百問論に云はく「若し父の寿の遠きを知らざれば復父統の邦に迷ふ。徒

に才能と謂ふとも全く人の子に非ず」と。三皇已前は父を知らず、人皆禽獸

に同ず。

天台宗の御本尊 釈迦如来 華嚴のルサナ、真言の大日等は皆此の仏の眷属たり

久遠実成実修実証の仏

始成の三身 報身 有始無終 有始有終

法身 真言大日等 無始無終

久成の三身 報身 無始無終

華嚴宗真言宗の無始無終の三身を立つるは、天台の名目を盗み取りて自らの依経に入れしなり。